

9 日本の院政期における仏教修行

【全4回】／開催方法：現地

みのわけんりょう
菘輪顕量

東京大学大学院教授
(人文社会系研究科・
インド文学インド哲学
仏教学 専門分野)



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000(納入期限：8月1日)

【日程・時間】【全4回】 8月5日(土) 13:20~14:50・15:00~16:30
8月6日(日) 10:30~12:00・13:20~14:50

■受講に必要なもの

[テキスト] レジュメ配布

仏教は体験の宗教であると言われる。それは釈尊が、悩み苦しみから逃れるために、身心の観察を行ったことに起因する。この身心の観察が、初期には念処と呼ばれ、後には止観という名称で呼ばれるようになった。

このような仏教における身心の観察は、日本仏教の中にも伝わった。それは飛鳥時代の道昭から始まると考えられるが、平安時代には徳一や最澄によって、その実際がどのようなものであったのかが知られる。

本年の講義は、前年度に引き続き、日本の院政期の時代、仏教者たちがどのような修行を行い、またどのように修行を捉えていたのかを考察する。院政期の時代は、論義と呼ばれる教学の研鑽が重要なものと捉えられていた時期であり、四ヶ大寺と呼ばれる寺院の僧侶達は、学問的な修学に励んでいたことが知られている。しかしながら、実際の僧侶の方達が、どのような修行を、どのようなことを理論的な背景としながら実践していたのかは殆ど知られていない。

講義の中では、院政期の法相宗と三論宗の僧侶に焦点を当てて、その実体を明らかにする。

第1講 三論宗僧侶における修行

第2講 三論宗僧侶における修行

第3講 法相宗僧侶における修行

第4講 法相宗僧侶における修行

【参考書】

①『日本仏教史』 著者：菘輪顕量 出版社：春秋社 出版年：2015